

## 「満月という観察対象」

一口に「満月」といっても、実はいろいろな満月があります。少し欠けて見えれば「だいたい満月」、地平線に近ければ「大きい満月」、明け方には「沈む満月」、「赤い満月」、「青い満月」・・・

実は厳密な満月というのは、地球からは見ることはできません。真の満月は月齢15(正確には約14.75)の月で、月球の半面に完全に太陽光が当たって見える状態です。しかしそうになると、太陽—地球—月が一直線に並んでしまい、月食が起こってしまいます。満月の晩に月食が起きていない、ということは、太陽—地球—月の並びが、ほんの少しずれていることになります。そういう意味では、月食(部分食)が始まる直前と、終わった直後が、地球から見える最も「正しい満月」と言えます。

満月という月の動きは「夕方に東から上って、真夜中に南中し、明け方に西に沈む。」つまり、一晩中見える月、と理解されています。地球を挟んで、太陽と反対側に位置するのが満月ですから、これは当然に思えます。しかし、これは日本での見え方の特徴であって、地球のほかの場所では全くちがった見え方をします。例えば北極圏では6月の「白夜」の季節、満月はほとんど地平線から上りません。逆に、12月の「極夜」の季節には、満月はほぼ24時間見えっぱなしです。スウェーデンの「月の動き」の授業を一度見てみたいです。

昨夜は満月でした。それも特別な満月。13日の金曜日で(特に意味はない)、夏至に一番近い満月で地平高度が低い(大きく見えると錯覚する)、地球からの距離が362,000kmと近い(視角度が大きい=実際に大きく見える)。こういう好条件の次の満月は、何と2098年だそうです。



2014,-6,13の満月  
埼玉県小川町に設置したカメラを、新幹線車内から遠隔操作する、という離れ業で撮影。